The Japan Society for the Comparative Study of Civilizations

比較文明学会会報 85

2026.9

巻頭言

物質と心から文明を考える

吉田　晃章

筆者はここ数年アンデス文明の考古資料、とりわけ笛吹きボトル（whistling bottle, 鳴笛壺）と呼ばれる土器に関心を寄せてきた。笛吹きボトルは、ボトルに水を入れたり、水が入った状態で傾けたりすることで、内部の水と空気が動き、音を発する器である。一見すると、それは土で作られた一つの造形物にすぎない。しかし、そこには、素材としての土や水、空気といった物質、音を生み出す技術、鳴らす動作、聴くという聴覚的認知、そして儀礼などの経験が結びついている。

考古資料に向き合っていると、文明とは、文字に記された思想や制度だけで成り立つものではないことに気づかされる。人間は、土器を作り、石器を打ち、金属を鍛え、道具を手にすることによって、世界を理解し、他者と関係を結び、自らの心を形づくってきた。人工物（artifact）は単なる道具ではない。それは、人間の技術や感覚、信仰、恐れなど価値観を宿す媒体でもある。

私が近年関心をもっている「マテリアマインド」という視点は、この物質と心（認知）の関係を捉えようとするものである[1]。ここで言う心とは、個人の内面に閉じ込められたものではない。心は、身体を通して世界に触れ、道具を用い、環境に働きかけ、他者と関係するなかで形成される。物質は心の外部にある対象であるだけでなく、心の働きを支え、方向づけ、ときに変容させる存在でもある。

この視点は、現代の認知科学とも響き合う。近代以降の科学的世界観は、自然と文化や社会、人間と動物を切り分け、合理的に分析することで大きな成果を上げてきた。認知科学もまた、心を情報処理として理解することで、人工知能や言語研究、さらにはロボティクスや精神疾患の理解などに大きく貢献してきた。しかし、人間の心は、単純な入力と出力、あるいは記号操作だけで説明できるものではない。人間は矛盾した感情を抱き、文脈によって判断を変え、身体や環境、記憶や社会関係のなかで揺れ動きながら行動する。

そのため近年では、身体性認知や環境との相互作用、さらには汎量子モデリング（Quantum-Like Modeling, QLM）のように、古典的な合理性や決定論では捉えきれない心の重層性を考える試みが進んでいる[2]。重要なのは、心を孤立した情報処理装置としてではなく、身体やそれを取り巻く社会や環境、適応するために生み出される技術や物質との関係のなかで捉え直すことである。マテリアマインドも、こうした問題意識の延長線上にある。

伊東俊太郎先生は、人類史を大きな文明史的転換の連続として捉えた。人類革命に始まる五大革命といった視点から、人類がいかに世界認識を変え、社会の仕組みを作り替えてきたのかを論じたのである。現代の私たちもまた、新たな文明史的転換の只中にいる。冷戦後、世界はグローバル化によって一つに結びついていくかのように見えた。しかし現在、世界はむしろ分断と再編の時代に入っている。ウクライナ戦争の長期化、米国とイランをめぐる緊張、中東情勢の不安定化は、国際秩序がなお力と恐怖によって大きく揺さぶられていることを示している。トランプ大統領は、アメリカ第一主義を掲げ、他国への介入も辞さず経済的にも秩序的にも世界情勢に大きな影響を与えている。

ここで見逃してはならないのは、戦争もまた物質と心の問題であるという点である。武器は、金属や火薬のみならず、電子部品や半導体、衛星情報、人工知能などから成る高度な技術的産物である。しかし、武器そのものが戦争を始めるのではない。恐怖や憎悪、報復、正義、安全保障への不安といった心が、武器に意味と方向を与える。人工物は人間の創造性を支える一方で、その暗部をも映し出す。

しかも現代の武器は、人間の手を離れ無人化し、自律化している。ドローンや自律型兵器、AIによる標的認識は、攻撃する者とされる者との距離を広げ、殺傷という行為の認知を変えつつある。AIは、情報文明の新たな段階を切り開きつつある。AIは、知識の生産や教育、労働、政治的判断、さらには戦争の方法にまで関わり始めている。AIの軍事利用をめぐっては、国際的な枠組み作りも進められているが、主要な軍事大国を含む合意形成は容易ではない。アルゴリズムによる判断は、人間の倫理的感覚をどのように変えていくのだろうか。

アンデスの笛吹きボトルに耳を澄ませることと、現代の武器やAI技術を考えることは、一見すると遠く離れているように見える。しかし、どちらも人間が物質を通して世界に働きかけ、その物質によって逆に心が形づくられているという点では、深くつながっている。人間の心は、身体を通した相互作用のなかで生成する。比較文明学の役割は、過去の人間の営為を研究することにとどまらない。過去の多様な文明を手がかりに、比較により現在を相対化し、未来を構想することにある。自然と文化、物質と心、戦争と共生を結びつけて考えること。そのような視点から、本会が培ってきた学際的な対話の蓄積をもとに、文明をめぐる問いをさらに深めていきたい。

（東海大学）

1　松本直子（岡山大学教授／文明動態学研究所所長）を領域代表とする学術変革領域研究（A）「マテリアマインド：物心共創人類史学の構築」では、物質と心の相互生成を捉える新たな概念として「マテリアマインド」が提起されている。

2　ここでいう汎量子モデリング（Quantum-Like Modeling, QLM）とは、人間の脳や心が物理的に量子力学そのものとして働いていると主張するものではなく、むしろ、入來篤史（帝京大学教授／理化学研究所）や田中彰吾（東海大学教授／文明研究所所長）が論じるように、古典的な合理性や線形的な因果関係では捉えきれない、判断の揺らぎ、文脈依存性、意味の重なり合いを記述するために、量子確率論や非可換確率論の形式を援用する試みである。心や文化は、外部から一方的に観察される対象ではなく、身体、物質、環境、他者との相互作用のなかで生成する出来事として理解される（入來篤史・田中彰吾（2026）「人文学における認知フレームの量子論的転回」『認知科学』33(1), 106–117.）。マテリアマインドの視点もまた、物質と心を切り離すのではなく、その相互生成の過程に文明の基盤を見いだそうとする点で、この認知科学の新たな展開と深く響き合っている。